



コスモス

# 町内会短信 9月号

2022年9月1日 川沿中央第一町内会長 金山征晴

長月

8月6日は久々に七夕子ども会を開催することが出来ました。天気にも恵まれて、大勢のお子さんや大人の皆さんも加わって心ゆくまで花火を楽しんでいた様子が、今も目に浮かびます。七月末に実施したラジオ体操も連日爽やかな朝日につつまれて、30人以上が楽しく体を動かしていました。感染拡大が収らず、なかなか行事が実施出来ない中ではありますが、少しでも皆さんが顔を合わせて楽しむ機会を作りたいと改めて感じました。

## 8月の町内会活動報告

- 8月 2日(火) **避難所運営研修** (於藻岩小、2名参加)
- 8月 3日(水) **どんぐり公園清掃** (Bグループ)
- 8月 6日(土) **七夕子ども会** (どんぐり公園)
- 8月10日(水) **資源回収 / ふれあいガーデン整備**
- 8月17日(水) **どんぐり公園清掃** (Cグループ)
- 8月24日(水) **ふれあいガーデン整備**
- 8月31日(水) **どんぐり公園清掃** (Dグループ)

## 9月の町内会活動予定

- 9月 7日(水) **ふれあいガーデン整備** (8:30)
- 9月11日(日) **こども御輿** (9:30~11:30)
- 9月14日(水) **町内会資源回収 / どんぐり公園清掃** (Eグループ 9:30)
- 9月17日(土) **連町パークゴルフ大会** (パークヒル 真駒内)
- 9月21日(水) **ふれあいガーデン整備** (8:30)
- 9月28日(水) **どんぐり公園清掃** (Aグループ 9:30)

※ 敬老会はコロナ対策で中止させて頂きます。それに代えて対象の方に記念品贈呈を企画しています。

### コラム

### 【川沿の小窓から ④】 川沿中央第一町内会 相談役 柴田田鶴子

実は筆者は7月2日、自宅で突然目まいと呂律が回らなくなる症状で、傍に居た息子がすぐ病院へ搬送、軽い脳梗塞ということで、一週間程の入院となった。医学の進歩のおかげで、点滴と投薬で、後遺症もなく無事退院できた。そのことを退院後、私が尊敬し、親とも姉とも頼む方に電話で報告した。その方は私の報告を聞き終わると口調を改めて「田鶴子さん、あなたの年で働き過ぎです。もう少し自分の身体を労わらないと……、田鶴子さんに長生きしてもらわないとみんなが困りますから……」。その厳しくも暖かい口調に、私のことをこんなに心配してくれる人が、身内以外にいるなんて…と涙があふれてきた。実母が逝って早や27年、欲得なしで心配してくれる人の真情に触れて私は胸がいっぱいになった。喜寿を越えても親身になって案じてもらえる倖せ(お金では決して買えない…)をしみじみ感じながら受話器を置いた。

裏面へ →

## 郷土史より(視野を広げて) 民俗学の先駆者・近藤富蔵(4(最終))

郷土歴史家 吉田邦行



この大勢の流人たちは、糧を求めて自ら生きていくために島の暮らしの中で、産業や文化を伝えたのである。たとえば、米での酒造りを禁止されていた島に、薩摩出身の流人・丹宗庄右衛門はイモ焼酎の製法を伝えている。そのイモ焼酎は島の特産品となり、大きな潤いをもたらした。

「島流し」は人ばかりではない。カラスまでもが「島流し」の刑を受けている。それは第五代将軍・徳川綱吉が発した『生類憐みの令』にある。綱吉が江戸城の外に出たとき、カラスの糞が頭に当たったので、怒った綱吉は、そのカラスを捕まえることを命じた。役人はようやく捕まえてきた。綱吉は、そのカラスを殺処分にしたが、生類憐みの令を出して、自ら無視するわけにもいかず、「よって、このカラスに島流しを命ずる」と…。カラスは牢カゴに入れられて伊豆諸島の新島に流された。だがカラスは新島で放たれると、すぐに江戸の方へ飛び去ってしまったという。なんとも間抜けな嘯と『生類憐みの令』である。また異説もあり、カラスが増え過ぎて困ったため、たくさんのカラスを島流しにしたものだ、とも言われているが真偽のほどはわからない。

閑話休題(むだばなしはさておき)、元年の大赦に漏れ赦免が遅れたが、明治30年(1880)に富蔵は54年に及ぶ刑期を終えた。自由の身になった富蔵は、近江にある父の墓参、西国巡礼を済ませて2年後、八丈島に戻り観音堂の堂守となり、同37年に波乱の生涯を終えた。享年83歳。

富蔵は島では傑出した人物で、流人の中でも中心的な存在であった。島随一の知識人として島民からも慕われ、島民の教育啓蒙に尽力した。この流人生活の間、和歌・俳句をたしなみ、島にある古文書を写し、島民の家系図を書き、動植物、黄八丈、風俗方言、流人帳など八丈島のあらゆることを記録した風土記「八丈実記」72巻を残した。それは現在でも、この地区の研究者にとって貴重な資料となり「八丈島の百科事典」とも呼ばれている。それは、4年以上にも及ぶ寺での修業が富蔵にとって、高い知識を身に付けさせたと言っても過言ではない。しかし、凶らずも富蔵は父の頑強な気質を受け継ぎ、また父と同じ文才を有し名を残すことになる。元NHK記者から作家・評論家となった民俗学者・柳田国夫氏は、「日本における民俗学の草分け」と富蔵を評している。まさに分類の細分化によって、民俗学という新たなジャンルを創設され、近藤富蔵は民俗学のパイオニアとして、真っ先に氏名が挙げられるのである。

もう言わじ 書かじと思ひ思へども またあやなくも しめす水荃

(もう言わない書かないと、そう心では思っているのだが、気が付くとまったく理屈に合わないのだが、筆の跡が書き示している)

※ 八丈島とは、東京から南方約300kmの海上にある。伊豆七島南部の火山島。面積約69km<sup>2</sup>。白石区の面積34km<sup>2</sup>の2倍の面積。また、黄八丈とは、島特産の草木染の絹織物。(完)